

# からくり人形師九代玉屋庄兵衛に聞く

聞き手：小山ブリジット（武蔵大学名誉教授）  
（Brigitte Koyama-Richard）

同席者：織田正太（九代玉屋庄兵衛後援会事務局長）

## はじめに

武蔵大学では2023年3月7日から10日まで「ロボットと人間：交錯する東西文化／機械に心は宿るか」と題する公開講座（第75回）が開催されました。これは武蔵大学東西文化融合史研究会（東西研／代表：踊共二武蔵大学教授）が企画立案したものです。からくり人形師九代玉屋庄兵衛先生は、この講座の一環として3月8日に実演と解説を行っていただきました。会場の大教室は満席で熱気にあふれていました。本稿は、その後2023年11月30日に玉屋先生の工房で実施した対談を記事にしたものです。玉屋先生は日本の貴重な伝統の技であるからくり人形の製作と普及活動に長くたずさわってこられ、海外でも高い評価を受けておられます。先生は2014年に「愛知の名工」として、翌年に「祇園祭山鉾行事功労者」（京都市）として、また同年に「現代の名工」（厚生労働大臣が認める卓越した技能者）として表彰されておられます。さらに2019年には文化庁長官賞を受賞されておられます。

江戸時代から受け継がれているからくり人形の技術は、意外なことに現代の機械工業にも影響を与えています。最新のロボット工学にとりくむ科学者たちも、過去の自動機械・自動人形に注目しています。からくり人形は喜怒哀楽の「心」をもつかのような動きを見せ、私たち自身の心を動かします。このことはAIで制御された最先端のヒト型ロボットと私たち人間の関係を考えるヒントにもなります。からくり人形は、いわばロボットの原型だからです。

私たちは公開講座で九代玉屋庄兵衛先生によるすばらしい実演を見せていただき、詳しいご説明をうかがうことができましたが、ご参加いただけなかった方々および本紀要の読者の皆様にも日本が世界に誇るからくり人形の魅力と文化的価値を知っていただきたいと考えて企画したのがこの対談です。なお本稿の掲載にあたっては、内容の理解を助けるために表現を改めたり、発言の順番を入れ替えたりする編集を行ったことをお断りしておきます。



写真1 「茶運び人形」を製作する  
九代玉屋庄兵衛

## 対談

小山：玉屋先生、お忙しいところ誠にありがとうございます。よろしく願いいたします。

玉屋：こちらこそ、よろしく願いいたします。

小山：それでは質問に入らせていただきます。先生は九代目でいらっしゃるんですが、初代はいつごろから活動なさっておられるのでしょうか。

玉屋：名古屋では1733（享保3）年からです。もとは京都なのです。京都の庄兵衛という人形師が名古屋東照宮のお祭で伝馬町の鶴を作りました。林和靖車りん な せい しゃというのです。その鶴を動かすために、お祭の前に名古屋に入り、メンテナンスつまり修理と下準備をしていました。お祭が終わったら、またきちんとしまってお京都に帰ったのです。

小山：名古屋では1733年から初代の活動が始まったのですね。

玉屋：はい。京都と名古屋の往復はたいへんなので、もう名古屋に移り住んでしまおうということになりました。それが翌年のことで、西暦でいう1734年のことなのです。庄兵衛は名古屋の「玉屋町」というところに住みました。それが初代玉屋庄兵衛というわけです。

\*\*\*\*\*

小山：ご説明ありがとうございます。次の質問に移りたいと思います。初代の玉屋庄兵衛はたいへん立派なお仕事をなさり、不動の地位を築かれましたが、九代目の玉屋先生はその江戸時代からの伝統を継承しつつ、新しいチャレンジをなさっていると思います。九代目の玉屋先生のチャレンジは具体的にはどのようなものでしょうか。

玉屋：いちばん古い人形としては、二代目のものが残っています。現在は名古屋市の有松というところにあります。もとは玉屋町にあった山車が売られ、有松にあるのです。玉屋庄兵衛は代々、修理・復元を手がけるだけでなく創作にもとりくんでいました。創作が求められたのは、お祭の山車だしに上山人形うわやまが乗っていないものがあるからです。愛知県でいうと四百いくつの山車があるのですが、上山人形が乗っているのはその三分の一です。かつて人形にはたいへんなお金がかかったからです。それで田舎のほうでは資金が足りなくて上山人形はできなかった。それで上山人形が乗っているのは三分の一なのです。だから新たに乘せてほしいという注文があるわけです。そのときには物語を考え、新たに創作することがあります。それから茶運び人形や弓曳童子など、座敷からくりの注文があるときも、三番叟人形さん ぼ ぞう、御所人形などを新しく作ってお出ししています。

小山：なるほどそのような場合には創作ということになりますね。先生が新たに作られる人形にはどのようなものがあるのでしょうか。すこし詳しく人形の名前を挙げていただけるといいでしょうか。

玉屋：座敷からくり人形として茶運び人形、弓曳童子などがありますが、創作としては三番叟人形、唐子の独楽遊び人形、あとは床の間などに飾る御所人形や子どもが持って遊べる小さい御所人形などがあります。それから、三宅一生さんがプロデュースし、デザイナーの山中俊治さんが描いた絵をもとに具現化した弓曳小早舟のようなものもやっています。



写真2 江戸前期に誕生し、その後絶えたものを七代目が復元した「茶運び人形」。写真の人形は九代玉屋庄兵衛製作



写真3 内部の歯車やゼンマイなどのからくり機関がわかる裸像の茶運び人形



写真4・5 御所人形。うしろの紐を引くと子どもが鹿のお面をかぶる

\*\*\*\*\*

小山：日本のからくり人形と18世紀ヨーロッパの黄金時代につくられていた「オートマタ」の類似点や相違点について先生のお考えを聞かせていただけるといいでしょうか。

玉屋：ゼンマイとカムが使われている点ではオートマタとからくり人形は似ています。オートマタではカムが20～30枚あり、いろいろな動きができるようになっています。そしてワイヤーやピアノ線などを使っています。ただし違いもあります。ヨーロッパのオートマタというのは基本的

に人間で、大人であることが多い。動きは人間に近い。スイスの場合がそうですが、ヨーロッパ全体に、人体に近いものを作りたいという気持ちが強いのです。だから機械（動きのメカ）はすべて隠してしまう。それがヨーロッパ風。オートマタの世界です。日本のからくり人形の場合は子どもが中心です。子どもがいろいろな芸をしたりするわけです。弓曳童子も「童子」ですから子どもですよ。茶運び人形もそうです。かわいらしい子どもが何かを動かす。それがヨーロッパとの違いです。ヨーロッパでは大人がピエロになって椅子を持ち上げたりする。内部にオルゴールを入れたりもする。

玉屋：それからオートマタより日本のからくり人形の方が200年くらい早いですよね。日本の品玉人形や弓曳童子などがヨーロッパに流れていった時代があったと思います。1800年代に日本で作られたものを外国人がヨーロッパに持ち帰り、向こうの技術者が同じようなものを作ったこともあります。1850年代くらいかな。だからヨーロッパには、しかけが日本のからくり人形に似たオートマタがある。もちろん見た目は違います。同じ人形でも日本は子ども、ヨーロッパは大人が多いですから。

小山：武蔵大学では、いわゆる「マリオネット」も見せていただきました。チャップリンをイメージしたものでした。あれはどのように動かすのですか。

玉屋：あのチャップリンのマリオネットはヨーロッパの人形師に譲ってもらったものなのですが、単純なあやつり人形で、ゼンマイやカムは使われていません。マリオネットは人が手でもって10数本の糸を上からあやつり、人形の手、足、顔などをひっぱる。それで踊ったり、いろいろな芸ができるわけです。マリオネットは、ほとんど糸でやるのです。

小山：そうしたものは日本にはありませんか？

玉屋：日本にもありますよ。あやつり人形が。

織田：結城座のあやつり人形などがありますね。

小山：江戸時代からですか？

玉屋：江戸時代からあります。



写真6 スイスの人形師から贈られたチャップリンのマリオネット（武蔵大学での実演風景）

\*\*\*\*\*

小山：ありがとうございます。次の質問に入らせていただきます。からくり人形の定義というのはあるでしょうか。事典や辞書を調べても、共通した一つの定義が見当たらないので、おうかがいしたいのです。

玉屋：定義はむずかしいです。

織田：玉屋庄兵衛後援会のホームページの説明をごらんください (<http://karakuri-tamaya.jp/knowledge.html>)。からくり人形の定義は山崎構成さんという研究者の本に詳しく書かれているのですが、私たちとして同じように定義しているわけではありません。私たちがやっているのは実践的なことであって、学問的な探求ではありません。

小山：なるほどよくわかります。

織田：ホームページには参考までに学術書も入れておきました。

玉屋：端的に言えば「人形が動く」というのが定義といえば定義です。

小山：たしかに、そういうことですよね。

織田：マリオネットは人が上から糸を使って動かすので、あやつっている人が見えます。カーテンがあっても人が動かしているのがわかる。しかし、からくり人形は下から歯車、カム、ゼンマイ、バネなどを使って動かすので、あたかも人形がロボットみたいに自分で動いているように見えます。この人形がいろいろな芸をするわけです。AI 制御のロボットじゃありませんけど、まるで生きているかのような動きをします。私はそれが本質的なところだと思います。

小山：やはり実践にかかわっておられる先生方のお考えが大切なので、辞書にはない説明をしていただき、感謝いたします。

玉屋：江戸時代、ふつうはただ人形を飾るだけだったのが、技術に長けた人たちが、ちょっと手が動くようにすれば人のように見え、不思議さも出ると考えて工夫してみた。それが始まりだったのだと思います。マリオネットも動くのですが、こちらは上から吊ってあやつるわけですから、人が見えてしまいます。それを見えにくくして動かすようにしたらオートマタができるわけです。隠された胴体にゼンマイが中に入っていて、カムが回って糸をひっぱる。これがオートマタ。要するにマリオネットが進化したものです。そしてもっと進化すればロボットになる。自動人形が自動機械になるわけです。ただ飾ってある動かない人形より、ちょっと動いた方が面白い。そういう人間の気持ちや技術を高めさせ、動く人形が人間のように思えるまでになる。その点でオートマタとからくり人形は近い関係にある。そういうふうに僕は思っています。

小山：よくわかりました。

玉屋：からくり人形は、日本古来の祭とも関係しています。昔から山車からくりの鉦のてっぺんには松がたちます。愛知県全体（とくに尾張にあたる地域）がそうです。神田祭や祇園祭も同じです。そこに神が降りるわけです。この部分に人形が飾ってあるのです。松の下に小さい人形が。そこに天の神が宿って町を巡る。これが本来の祭の姿です。神田にも山（車）がありました。現在は神輿が一般的ですが、本来は山車です。赤坂にもあると言われていました。やはり人形を飾り、そこに神が乗り、町の人たちが担いで回り、火事がないように、病気がないように祈願する。これが本来の祭です。それが尾張の場合、その人形を動かそうとする。それを神さまに見せて、そこに乗ってくださいねというわけです。不思議な人形です。もちろん人々は面白がる。そこから尾張では、からくりが盛んになるわけです。

\*\*\*\*\*

小山：詳しいご説明をありがとうございます。それでは次の質問ですが、からくり人形の種類はいくつありますか？

玉屋：まず「山車からくり」。そのなかには糸であやつるもの、差し金であやつるもの（離れからくり）があります。それから茶運び人形などの「座敷からくり」。ほかに「人形浄瑠璃」もあります。今はそれだけです。江戸時代にはもっといろいろな見世物でからくり人形を使っていました。それが山車からくりに移り、文楽に移り、さらに歌舞伎の外連、回り舞台、どんでん返しなどに発展したのではないかとされています。

\*\*\*\*\*

小山：ありがとうございます。それでは別の質問です。先生は江戸時代の貴重なからくり人形の修復もなさっておられます。ぼろぼろになっていたり、完全に壊れていたりする人形を何体か修復しておられます。たとえば弓曳童子です。弓曳童子のメカニズムはすばらしく、たいへん複雑だと思いますが、みごとに復元されました。時間はどのくらいかかったのでしょうか。トヨタコレクションの実物（田中久重作）を見てまいりました。ほんとうにみごとですね。すばらしいからくり人形です。以前、玉屋先生がテレビ出演なさったときに解説しておりましたが、この場でも簡単にご説明いただければと思います。

玉屋：茶運び人形や弓曳童子というのは、お座敷で使う人形です。弓曳童子は最高傑作と言われていて、見た目の美しさに表れているように、最良の素材を使っています。それから動きの良さ。人形が的をねらって矢を打ち込む動きは、たしかに最高です。150年前には山車からくりにもそういう人形がありました。弓射り童子といいます。唐子が矢を2本か3本持って人形に渡し、人形はほんとうに矢をつまんで的をねらって当てます。

小山：今は使われていないのですか？

玉屋：使われています。

小山：どこですか。犬山ですか？

玉屋：東海市の横須賀というところ。いちばん最近作ったからくり人形は乙川の浅井山のものです。これは小烏丸夢之助太刀といって、勝手に日本刀が出てきて大蛇を退治するものです。それもほんとうにぼろぼろになっていました。まずは復元が肝心です。

小山：やはり数か月間もかけるのですか？

玉屋：大蛇の動きが複雑で、3年ほどかかりました。

織田：あれは伊勢湾台風もあってぼろぼろになっていて、何がどう動いているのかまったくわからなかったそうですね。それを玉屋さんがたぶんこうだろうということで作り直したものが、今年（2023年）2月のおわりのお祭りでデビューしたのです。それはYouTubeにあげています。半田市乙川、浅井山、小烏丸夢之助太刀。これで出てきます。



写真7 江戸末期にからくり儀衛門（田中久重）により発案されたものを九代玉屋庄兵衛が完全復元した「弓曳童子」

玉屋：小烏丸夢之助太刀の小烏丸。これは名刀なのです。武士が居眠りしているところに大蛇がやって来て、名刀小烏丸が自分で勝手に動いてやっつけるという筋書きです。

織田：それがまさにぼろぼろでしたね。

玉屋：ほんとうにひどかったです。

小山：たしかテレビでも。

織田：NHK でやっていましたね。

小山：拝見いたしました。

玉屋：「プロフェッショナル仕事の流儀：九代玉屋庄兵衛」でしたか。

小山：はい、すばらしい番組でした。

織田：今の話題は山車からくりでしたが、玉屋さんは座敷からくりの復元にも力を尽くしています。

安城の古い民家で発見され、市の教育委員会が国立科学博物館の学芸員に問い合わせたら、玉屋さんに相談しなさいということになって再生につながりました。これもぼろぼろだったらしいです。ぼろぼろのうちに文化財指定したものですから、玉屋さんがそれを壊して内部を見るわけにはいかないので、かなり苦労したようです。あれも何年かかかりましたか？

玉屋：1年くらいでしたかね。

織田：そうでしたか。安城市歴史博物館に展示してありますので、できれば見ていただきたいですね。

\*\*\*\*\*

小山：製作者の視点からのたいへん興味深いお話、ありがとうございます。それでは次の質問です。

復元をなさる場合、もっともむずかしいのはどのような点ですか。

玉屋：いちばんむずかしいのはやっぱり顔です。

小山：顔ですか。

玉屋：何代目が作ったのか意識しながら、違いがわかるように、そのまま復元しなくてはならない。

室町時代に誕生した能面もそうです。同じような面を打って（作って）も、作者が違うと顔は絶対に違います。それをもとと同じになるように復元するのがいちばんむずかしい。動きは想像で再現すればよいのですが、顔は違います。

小山：私たちには動きも想像できませんが、先生はこれを見て、カムなどのメカニズムをたしかめ、おそらくこういう動き方をするのだろうと推測なさるのでしょうか。

玉屋：山車からくりの場合、使われる糸は基本的には7本です。7本の糸で動かすことができます。

足が2本、手が2本、顔が3本です。右を向いたりお辞儀をしたり、手が動いたり足が動いたり。こういう動作に必要なのが7本の糸なのです。それから人形に扇子を持たせる場合は、開いたり閉じたり扇いだりするので、そこでまた3本増えます。多いものだと20数本から30本近くです。人形一体につきです。古いものを絶えず修復していると、こうやって動いていたのだろうと推測できるようになります。どこに糸をつけるか、また滑車をつけるか、二代目や三代目の人形も残っていますから、それらを何十年も見ていると、動きを想像するのはそれほどむずかしくなくなります。

小山：そうですか。ふつうの人間にとっては信じられないことだと思いますが。すばらしいお仕事ですね。

\*\*\*\*\*

小山：今度は材料についておうかがいしたいと思います。江戸時代のからくり人形は木で作られています。ヨーロッパでは金属を使います。江戸後期になると部分的に金属が使われたと書いてある文献があるのですが、それはほんとうでしょうか。

玉屋：ほんとうです。

小山：現在先生が人形を修復されるときには木だけをお使いでしょうか。それとも金属もお使いになることもあるのでしょうか。

玉屋：人形によって違います。日本では文化財に指定されているものはほとんど同じ材料で復元しなくてはなりません。もとが木であれば同じ木を使います。セミクジラのヒゲで作ったバネが使われていたら、それについても同じものを使う必要があります。再利用できる材料がなくなったら、金属のバネを使わざるをえないかもしれませんが、そもそも江戸時代には新しいものを作ってはならないという御法度があったのですが、人形は特別扱いされていました。だから茶運び人形や山車からくりが作られたわけです。しかし金属が必要な部分もありましたから、江戸時代の中期には鉄などが使われています。前期にも例があります。ヨーロッパのオートマタは金

属製ですが、そのきっかけは戦争が何度も起きて森が焼け、木材より金属のほうが入手しやすい状況が生まれていたことにあると聞きます。その材料が鉄であったり真鍮であったりしたわけです。しかし、そもそもヨーロッパでも最初は木を使っていました。もちろん、日本はほんとうに木が豊富ですから、人形製作に適した木を使いつづけることができたと言えます。

\*\*\*\*\*

小山：ありがとうございます。次に、玉屋先生のオリジナルのからくり人形についてですが、新しい人形をお作りになるときはご自分でテーマや人物を選ばれるのでしょうか。それとも注文に応じてでしょうか。

玉屋：両方です。町衆に頼まれた物語と僕自身が考えた物語の両方があります。たとえば自分で考えた「烏天狗」は一枚下駄で杭を渡っていきますが、昔は二枚下駄でした。安定がいいですから。一枚下駄は山伏か天狗くらいしか使わないものです。鞍馬の義経が修行した場面を作ってみたかったから、一枚下駄にしたのです。鞍馬だったら天狗でしょう。それで一枚下駄ということになり、新しいしかけを考えたわけです。

小山：そうなのですか。興味深いですね。

玉屋：昔の物語はからくりにはよく使われます。日本や中国の物語であったり民話であったり。これは江戸時代から続いています。

小山：玉屋先生は最近も何か新しいからくり人形をお作りになりましたか。

玉屋：自分で考えた座敷からくりとしては唐子の独楽遊び。手のひらで独楽がくるくる回ります。昔はそうしたものはありませんでした。

\*\*\*\*\*

小山：それでは次の質問です。玉屋先生は人形の頭もご自分で木を彫って作っていらっしゃいます。茶運び人形の顔も七代目や八代目のものと比べれば違うと先生から説明をいただきました。具体的な違いを教えてくださいませんか。

玉屋：七代目にも八代目にも個性があります。もちろん僕にも個性があります。七代目は丸くてつぶれた顔が好き。それが作家の世界なのです。僕の場合は、だれからも「かわいいですね、この顔は」と言われるのがうれしくて納得できます。八代目のものは、ちょっときつい顔だと言われています。

小山：たしかに優しいですね。玉屋先生のは。

玉屋：それぞれの作家のイメージが出るのです。ただし玉屋流の場合、耳はよく似ていますよ。彫り方が似ているからです。

小山：日本のお人形の耳は、けっこう大きいですね。ヨーロッパのものより大きいような気がします。じっさいの日本の子どもの耳は大きいとは思えませんが、何かシンボルのようなものでしょ

うか。意図的にそういうふうに？

織田：福耳という言葉があります。耳が大きいということは、賢い人であるとか人格者であるとか。お金がたまるとか。耳は大きい方が幸運という民間の思想があるのだと思います。しかし西洋のものは小さく、日本のものは大きいというのは初めて聞きました。私は子どものとき、福耳にならないかなと思ってひっぱったりしていました。

小山：おもしろいです。たしかにおっしゃるとおりかもしれません。大きく作った方が幸福を感じることがあるかもしれませんね。

玉屋：僕は考えたことがなかったですね。大きいとか小さいとか。バランスの問題は考えますが。

小山：私はいつも耳が立派だと思っておりました。

織田：歴史上の人物の絵を見ると、やはり大きいですよ。おそらく本人が大きく描けと言ったのではないのでしょうか。

小山：絵画でもそうなのですね。わかりました。ありがとうございます。

\*\*\*\*\*

小山：今度は山と山鉦についての質問です。「やまほこ」と「やまほこ」という読みがあるようですが、正しいのはどちらですか。

玉屋：両方正しいです。山鉦は京都。こちらでいうと山車<sup>だし</sup>です。いろいろな町で曳き方も名前も違います。高山では屋台です。犬山は「車山<sup>ま</sup>」ですが、名古屋では「山車<sup>だし</sup>」なのです。

小山：「やまほこ」や「やまほこ」は何をさすのですか？

玉屋：一緒にしてはダメなのです。鉦は鉦、山は山です。別のものです。

小山：文章にするときには気をつける必要がありますね。いずれにしても「山、鉦」の文化はすばらしいと思います。犬山祭や祇園祭を拝見しました。江戸時代から玉屋庄兵衛はたいへん尊敬され、多くの山車からくり人形の製作にたずさわってこられました。祇園祭で有名なのは玉屋庄兵衛



写真 8 犬山祭。車山の総揃え (2019年)

によるとうろうやま蟻螂山と呼ばれる山車ですが、その人形のあやつり方はたいへんむずかしいと聞きます。数人が山車に入っておられます。どのような方々があやつっておられるのか、ご説明いただけるでしょうか。

玉屋：人形方ですね。人形方は町内によって違います。祇園祭は特別です。初代玉屋庄兵衛が林和靖車という鶴を動かして京都から名古屋に行った時代もそうだったのですが、お祭は基本的に豪商が仕切りました。豪商は町内ではなく田舎の若い人を集めて山車を動かし、お囃子には能楽の若い子を連れてきました。そして人形をあやつるために人形方を遠くから集めたわけです。豪商はお客さんたちに料理をふるまい、食べさせ、飲ませます。しかし京都以外では、今は町内で人形方を決め、上手に人形をあやつる練習をします。こちらで人形を作って渡したら、あとは町内でやるので、僕たちが動くことはありません。



写真9 犬山祭。練屋町からくり石橋獅子

小山：祇園祭の蟻螂山を操るのに大体何人入っていらっしゃるのでしょうか、その中には。

玉屋：蟻螂山の場合は4人です。まず手（鎌）と羽と顔。それから御所車もぐるぐる回りますから、これにもひとり。ずっとやるのはたいへんですから、交代しながら4人くらいでやります。多い場合は6人から7人です。人形によって違います。

小山：暑い時期ですし、たいへんなお仕事だと思います。犬山の場合ですと、人数は同じくらいでしょうか。

玉屋：5人か6人ですね。ふつう人形一体につき2人は必要です。手も足も顔もありますから。2人が両手を使います。

小山：練習はたいへんでしょうね。私たちは見る側ですから、美しくて楽しいと感じるだけですが。祇園祭のときも犬山の祭のときも、ほんとうに感激いたしました。

織田：もう一点、説明させていただきますと、京都の祇園祭の人形は基本的に動かないということです。3種類の人形がありますが、基本は動かない。蟻螂山は特別です。ただし祇園祭には稚児人形というのものが、放下鉾に座しているのですが、これは稚児舞を披露するために動きます。しかし、ご神体としての人形のほうは静止しています。むやみに動かすわけにはいかないと考えられたのでしょうか。一方、蟻螂山の Cama-kiri は昆虫ですから、動かして楽しもうと考えた人たちがいた。これが僕の仮説です。

小山：それにしても、蟻螂山の Cama-kiri はほんとうに立派ですね。大きいですね。

織田：たいへんな人気ですね。

小山：蟻螂山が登場すると、だれもが歓声をあげて喜んでますね。これは初代の玉屋庄兵衛さん



写真 10 1979年に復元された京都祇園祭蠮螋山のカマキリと御所車

が作ったのですか？

玉屋：それは不明なのです。蠮螋山は室町時代からありますから。京都に住んでいた庄兵衛が製作したかどうかは、わかっていません。隣の大津に「鯉山」といって鯉が滝登りをするからくりがあり、庄兵衛作とされることがあるのですが、こちらもわからない。

織田：不思議なのは、京都では人形は動かないが、隣の大津では動くことですね。京都とそれ以外では違うわけです。大津のホームページを見ると、人形が動くようになったのは尾張の影響だと説明されているのですが、大津の学芸員に聞いてみると「それは証明できない」と言われました。

小山：祇園祭の蠮螋山と玉屋庄兵衛の関係はまったくわからないということですか。

玉屋：七代目が復元したことはたしかです。蠮螋山は蛤御門の変（1864年）のときの火事で焼けてしまいましたが、それを七代目が復元したのです。1979年だと思います。

\*\*\*\*\*

小山：次の質問です。「魂」についてです。武蔵大学の踊共二教授がそういう研究をなさっていますので、お聞きしたいと思っておりました。日本でも西洋でも人形には魂が宿るといふ信仰があるとおっしゃっています。人形は完成されたときに魂をもつといえるのでしょうか。それともお祭のときでしょうか。

玉屋：お祭のときです。神社でお祓いして魂をもつのはお祭の前日ですね。本来は神が人形に降りたときに魂をもつわけです。しかし、僕が作ったから僕の魂が乗り移っているというようなことはありえませんよ。

小山：お祭が終わるとどうなるのでしょうか？

玉屋：魂を抜きます。

小山：そういうことなのですね。

\*\*\*\*\*

小山：先生のすばらしいお仕事を拝見していますと、からくり人形師はアーティストだと感じます。そのように言ってよろしいでしょうか。

玉屋：いろいろな呼び方ができると思います。職人であり、機械工であり、作家であり、アーティストであると言ってよいと思います。すべてのものを身につけなきゃいけない。

小山：すべてなのですね。ありがとうございます。それでは最後の質問です。からくり人形に関する玉屋先生の夢は何でしょうか。また若い世代に伝えたいメッセージはありますか。

玉屋：茶運び人形はもう400年近く前、江戸時代に作られたものです。1650年代と言われています。今の日本には、こうしたことを知らない人が多すぎます。書物や映像をつうじて知識を得ることができますが、じっさいに見てもらえば、ほんとうの良さが実感できるはずですよ。たとえば弓曳童子が的をねらうところ。僕はチャンスがあれば、世界中どこにでも行きたいと思っています。すでに25か国以上を訪問しました。日本の文化、ものづくりの伝統は、実物を見てもらい、楽しんでもらうことでしっかり伝わるはずだといつも考えています。これが僕の夢であり、メッセージです。

小山：ありがとうございます。玉屋先生はヨーロッパやアメリカにこれからもいらっしゃるおつもりでしょうか。

玉屋：チャンスさえあれば。コロナ禍でブレーキがかかりましたが、また大使館が日本文化を紹介する国際交流の企画に僕たちを招いてくれるでしょう。

小山：ぜひ玉屋先生のすばらしいお仕事をいろいろな国の方々にご紹介いただければと思います。武蔵大学で実演なさったときも、皆さんたいへん喜んでおられました。

玉屋：実物を間近に見れば、良いものはわかりますから。

小山：またぜひ、そういう機会をつくっていただければと心から願っております。本日はたいへん貴重なお話をうかがうことができ、感謝いたします。はじめて知ることや、あらためて気づいたことがたくさんありました。ご同席くださった織田正太後援会事務局長にも厚く御礼申し上げます。皆さま長時間にわたりご協力くださり、誠にありがとうございました。

名古屋市の九代玉屋庄兵衛工房にて

(写真提供) 1～5, 7, 10：九代玉屋庄兵衛後援会 8, 9：犬山祭保存会

